
渦

夏木 岳

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

渦

【Nコード】

N2263B

【作者名】

夏木 岳

【あらすじ】

私からはもう何も奪えない。このうねり渦巻く感情以外は残されていないのだから。

一年前に入社した会社をクビになった。

私の夢、ファッションデザイナーへの第一歩として入社したのに、才能を見出されず私までもがボツにされた。慣れない一人暮らしの寂しさにも、偉いだけの上司の叱咤にも、ライバルとの厳しい争いにも堪えてきたのに。あっさりと新入社員に抜かれて、焦るばかりの私はやはり淘汰された。

私は親父と大喧嘩をして、覚悟を決めて上京してきた。そんなころの気持ちなど打ち碎かれても、帰郷すれば、夢に破れた私を親父は優しく迎えてくれた。

ぼろぼろの私の心を紡ぐように、そつと優しく抱いてくれた。暖かい、懐かしい匂いのする両親の腕の中で私は久し振りに大泣きした。

男なら泣くな、と、そう教えてきた親父も、黙っていた。

涙には実は２種類あるそうで、泣いてスッキリするというのは、涙にストレス性のものが混ざって出てくるからだそうだ。

だからか、次の日の朝は、何もかもを全て蒸散させたかのようなそんな目覚め。泣く事に抵抗のあった（親父の言葉が根底にあるだけだが）私は涙の理由を再認識した。

ああ、初めからこうすればよかったのか。

疲れていた。私は疲れていたのだ。なんてことない。まだ、これから。空元気かもしれないが意気揚々と部屋を出、親父の仕事を手伝った。

中学や高校時代に無理やりやらされていた工場作業が、今では親

父と冗談でも飛ばしながら行える。白紙になった私は、身軽で、もともと存在していた自分になれた。それは志の終わりの延長線にあった、最高のスタートだった。

朝、お袋の仏壇を拝み、夕方まで工場で働く。過疎化と高齢化で人数の少ない親父の工場は、私を含め、良くて四人だった。そんなハードな状況でも、汗を流し、油まみれになりながらも充実した日々を送っていた。

エンディングまで、あとわずか。

数カ月が過ぎ、すっかり森に蝉が鳴いている頃、工場の経営が危うくなってきたのだった。私が我が儘を言わずに工場を継いでいれば、まだまだ経営していけたはずだ。

私は親父に謝った。だが、親父は自分を責めた。俺が悪いばかりだ、と。

そして雪化粧が山際を縁取り始めたころ、ついに工場は百余年をもって悠久の終わりを迎えた。

閉鎖の日、お世話になった人々、それも数名だったが、家で酒盛りをした。工場の最期の、給金さえもとに貰えないに働いてくれた粹な親父共に、私は心から尊敬の意を示した。

「いいかア！？ほんとのところは金じゃあ動かねえってことよ！」

「いよ、さすが色男。日本ー！」

「バカヤロ、世界一ってんだ！」

宴も既にたけなわ、共々酔い潰れた中、親父は一人で酌をしてい

た。決して泣くなど私に教えた親父は、一升瓶の口を握り締め、それこそ厭世的な目で酒の波うつのを眺めていた。どんな馬鹿騒ぎしようとして、一番泣きたかったのは、一番辛かったのは親父だ。

お袋を失って、今では工場も失った。親父には私が、私には親父が、たった一人が残されてしまった。

禍福はあざなえる縄のごとしと言うが、禍を黒、福を白と色分けすると、どういうわけか私の縄は真っ黒だ。

自分の大半を失っても、生きることを放棄しなかった強い親父。昨日一人哀しみに身を焼いていた親父が、亡くなった。

私たちはそれぞれに職を探しに行き、私が帰ったところ、親父は帰っていた。昨日の宴仲たちと一緒に、血の池に沈んで。

犯人はすぐに逮捕された。母校の男子生徒で、覚せい剤乱用による錯乱から親父共を刺し殺したのだった。

ついに私は一人だ。窓の外は快晴。雲一つない空、そう、腹立だしくも快晴なのだ。そんな空が、なぜ私の哀しみを望むのか。そして私から、何を奪っていくのか。

私は洗濯機を覗いた。透明なグラスに映る私の向こうで、水が踊っている。ドラムが回る度にざぶ、ざぶと。淡々と泡を立て、混沌と、猥雑に水が白濁していく。

親父が死んだ。親父共が。なぜに、私には全てを失う運命が待っているのか。なぜ親父共は死ななければいけないのだ。

世の中は不条理で、理不尽だ。

洗濯機が騒がしく働いている。ざはりざはり水が踊る。

水の他には、何も入っていない。

（後書き）

えー、ただの哀しい話。景情一致の練習台として書いてね。あと、ふだんのM a yの書き方を変えてみました。：変えれてない気もする…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2263b/>

渦

2011年1月15日22時23分発行